

令和2年度国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業[令和2～3年度指定] 中間報告書
—中学校—

都道府県・指定都市番号	33	都道府県・指定都市名	岡山県岡山市
-------------	----	------------	--------

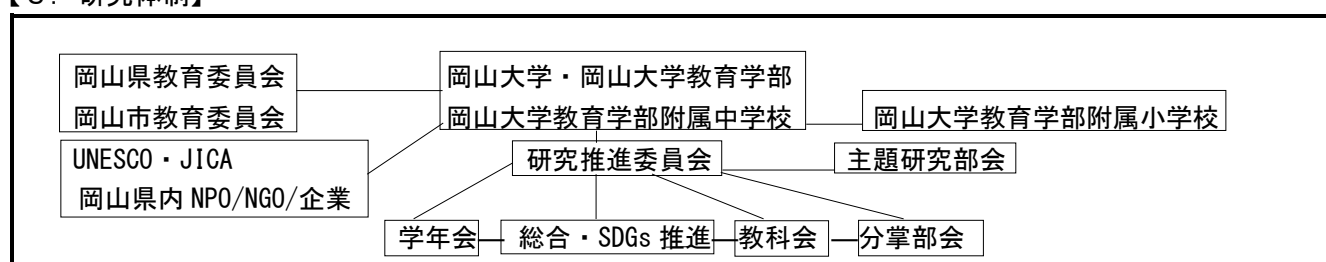
【1. 学校の概要】

ふりがな 学校名	おかやまだいがくきょういくがくぶふぞくちゅうがっこう 国立大学法人 岡山大学教育学部附属中学校			ふりがな 校長氏名	まえだ きよし 前田 潔
所在地	〒703-8281 岡山市中区東山 2-13-80 電話 086-272-0202 FAX 086-272-7941 e-mail fuchu@fuzoku.okayama-u.ac.jp				
(R2.4.1見込)	1年	2年	3年	計	(R2.4.1現在)
学級数	5	5	5	15	教員数 38名
生徒数	177	180	178	535	[うち、調査研究にかかわる教科等の教員数] 32名

【2. 研究主題等】

公募課題番号	「2(3)」資質・能力を育むために、教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質を高める実践研究(効果的なカリキュラム・マネジメントに関する実践研究)
研究の特徴	教育目標「自主自律 豊かな心で たくましく」のもと、カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえ、SDGsを意識した横断的・総合的な学習活動や探究活動を系統的につなげるカリキュラム開発を通して、学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒の育成を目指す。
研究主題	学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒を育成するカリキュラム・マネジメント—SDGsを意識した学びに向かう力・人間性等の伸長を中心として—
研究主題設定の理由	本校では、平成31年度よりSDGsを基にしたテーマ設定を行い、岡山大学、岡山理科大学、岡山ESD推進協議会などとの連携を生かした「総合的な学習の時間」の開発に取り組み、学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒の育成を図っている。そこで、蓄積された教科教育の知見と、SDGsを意識した各教科等や「総合的な学習の時間」の取り組みを活かして、カリキュラム・マネジメントを進め、社会に開かれた教育課程を通して、新学習指導要領において育成を目指す「学びに向かう力・人間性等」の伸長を図りたいと考えた。

【3. 研究体制】



【4. 1年間の主な取り組み】

<ul style="list-style-type: none"> ○令和2年度研究の目的、研究計画の立案・共通理解など ○全体、各教科の研究進捗状況の確認と共有(研究デザイン検討会) ○全体、主題研究部会でのテーマ研修会 <ul style="list-style-type: none"> ・「SDGs達成に向けたESDの新展開」「外部評価指標Ai GROWを活用したコンピテンシーのアセスメント」など ○総合的な学習の時間(ER)ESDカレンダー、カリキュラム・マップの検討・作成 ○SDGsを意識した総合的な学習の時間のカリキュラム開発(各学年単元プログラムのPDCA) <ul style="list-style-type: none"> ・第1～3学年における平和・キャリア・人権・福祉・国際などの単元学習プログラム ・第3学年個人テーマ探究活動における探究プロセスとW型問題解決学習の可視化・重点化 ・本校版ESDで育みたい能力・態度の自己評価実施(前期末10月・年度末3月) ・教科・領域等横断型授業の試行
--

- 各教科・総合における「学びに向かう力・人間性等」を測定する評価指標の検討と実施
 - ・本校版「目指す生徒像に基づく学びに向かう力・人間性等」の自己評価
(全校実施：第1回10月 第2回3月)
 - ・外部評価指標「Ai GROW」を活用した生徒のコンピテンシーの伸長の確認
(全校実施：第1回7月 第2回10月 第3回12月 第4回2月)
 - ・学校評価アンケートの実施(生徒・保護者・教員対象：12月実施)
- オンライン教育実践発表会による各教科・総合的な学習の時間の研究公開
- 全体共通研究の発信と成果発表
 - ・岡山大学定例記者発表
 - ・令和2年度 日本教育大学協会研究集会報告
 - ・文部科学省(国立教育政策研究所)でのオンライン研究協議会における研究成果発表(2月)
- 地域社会への取組内容に関する情報交換・発信(公民館・大学・市民講座など)
- 岡山市内公立中学校との連携協働プロジェクト(テーマ：環境・防災・人権など)
- 一年次研究成果の確認と次年度以降の研究計画の再検討

【5. 研究内容および具体的な研究活動】

(1) 研究内容

研究主題にある「学びの意義」とは、

- ㊦. 本質的意義(人間が人間として発達し、人間的本質を実現する)
- ㊧. 社会的・客観的意義(獲得した知識や教養を持続可能な社会づくりに生かす)
- ㊨. 主観的意義(自己の意欲やキャリアの実現など豊かな生き方とする)

に整理できると考え、持続可能な社会の創り手を育むにあたって、特に㊧を重視することとした。

研究の特徴における「SDGsを意識した」とは、「SDGs達成を目指すESD(=ESD for SDGs)の視点をもった」という意味である。ESDの視点をもった学びでは、様々な事物・現象が実社会や実生活と関わっていること、広範囲の多くの要素が複雑に絡み合っていること、協働的な問題解決が必要であることなど、持続可能な社会づくりの構成概念を捉えながら、多様な機関との連携・協働による学習プログラムを通して、「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」(国立教育研究所、2012)や「持続可能性キー・コンピテンシー」(UNESCO、2017)などに関連付けた評価が有効であると考えた。

また、研究主題における「自ら学び続ける生徒」とは、新学習指導要領に示された育成を目指す資質・能力の「学びに向かう力・人間性等」が、「感性や思いやり」と「主体的に学習に取り組む態度」の両面で高まっている生徒であると考えた。前者は自己効力、耐性、決断力、共感・傾聴力、柔軟性などの「コンピテンシー(非認知スキル)」により見取ることとした。後者は、「学習評価の在り方ハンドブック」(国研)より、「①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面」、「②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面」の二つの側面を観点別評価から見取ることとした。また、本校でこれまで取り組んできた、「探究的な学習活動の過程」や「生徒を学習の主体にさせる4段階のアプローチ」(学習課題の価値の自覚ー学習課題の解決の計画化ー学習課題の追求ー学習課題の解決の評価)を継続することが有意義であると考えた。以上をふまえて、本校版「目指す生徒像に基づく学びに向かう力・人間性等の評価項目」や各教科等の研究における評価指標、外部評価指標(自己評価に他者評価とAIの補正を加えた「Ai GROW」)などを活用しながら、本校の教育活動全体を通して「学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒の育成」を目指すものである。

(2) 具体的な研究活動

- ①研究主題を基に、各教科等における研究課題をそれぞれ設定し、育成すべき資質・能力を明確にし、それを効果的に育成するためのカリキュラムを立案・実施・省察・改善する取り組みを行った。その分析・検証にあたっては、独自の検証問題やパフォーマンス課題を活用したり、各教科で作成した「目指す生徒像に基づく自己評価」を実施したりすることとした。
- ②SDGsを意識した総合的な学習の時間について、3年間の見通しをもって、教科等とのつながりを活かした探究的学習活動の質の向上を図るカリキュラム開発を行った。つながりを可視化、教科横断型の学習を

推進するために、各教科会や教科横断的な会議を行い、総合的な学習の時間を中段にとった「学びのカレンダー」を作成した。

- ③総合的な学習の時間について、SDGs との関連や多様な関係機関との連携を生かしたプロジェクト型学習を発展・充実させるために、各単元学習プログラムに同心円状の「カリキュラム・マップ」を作成し、その質の向上と組織的、計画的な実施を図った。単元学習プログラムにおける ESD for SDGs の視点や生徒につけたい力、評価規準を明確にするために、単元計画表を整理した。また、ESD で育みたい資質・能力に基づく独自の自己評価も実施した。
- ④本校が目指す「学びに向かう力・人間性等」について評価項目を設定し、それらの伸長を測る評価手法を開発・実践した。可視化された「コンピテンシー（非認知スキル）」については、振り返りや指導・助言を通して、生徒が実生活や実社会と関連付けた上で、協働的な問題解決を通して、省察・改善できるようにした。

本校版 目指す生徒像に基づく「学びに向かう力・人間性等」の評価項目

※【 】は「Ai GROW」コンピテンシーを指す。

ア. 自制・敬意・・・学びにかかわる様々な「人・ものやこと・自分自身」を尊重し、謙虚に学ぼうとする力

※【個人的実行力】【耐性】【共感・傾聴力】

イ. 協働・貢献・・・学んできたことを活用して、日常生活や地域社会で身近な課題解決のために見通しをもって取り組むことのできる力

※【表現力】【影響力の行使】【地球市民】

ウ. 意欲・挑戦・・・学んだことで得られた知識や知見、思考や方法などをさらに身に付けていこうとしたり、深めようとしたりする力

※【自己効力】【柔軟性】【決断力】

新型コロナウイルス感染予防下においては、学校再開後の授業でもペアやグループ学習を部分的に制限しなければならなかったが、これらは他者とのつながりや客観的に自分を見る機会は欠かせない。そこで、気質診断・他者評価・自己評価に Ai 補正を加えた評価指標「Ai GROW」（IGS 社）を実施し、受検を通して他者意識を高め、協働・対話の素地を育むようにした。本評価指標におけるコンピテンシー（個人的実行力、耐性、共感、表現力、影響力の行使、地球市民、自己効力、柔軟性、決断力）は本校が目指す生徒像における「学びに向かう力・人間性等」と関連付けて、その伸長を分析・考察した。

- ⑤全体共通研究と各教科研究の関係性についての共通理解をもち、現代的課題に関わる教員研修を通して、SDGs 達成につながる ESD の視点を再確認し、研究を推進する学校組織風土の醸成を促進した。
- ⑥地域との密接なつながりを有する公立学校に対して、学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒を育成するカリキュラム・マネジメントについて発信した。

【6. 研究の成果と課題など】

（1）成果

- ①共通研究主題に基づく研究推進により、各教科研究計画書を作成し、カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた、目指す生徒像に基づく「学びに向かう力・人間性等」を育成する研究を行うことができた。
- ②SDGs を意識した総合的な学習の時間の「学びのカレンダー」と「カリキュラム・マップ」を作成し、単元学習プログラムを組織的・計画的に PDCA で実施する基盤が整った。また、探究プロセスの可視化・重点化により、生徒は課題を設定しやすくなり、教員は生徒自身が進める探究活動を支援するという役割を今までより認識できるようになった。学校評価アンケートでは、本校の「SDGs 関連学習」への積極的な取り組みに対して、肯定的な割合は生徒 97.1%、保護者 97.6%であった。
- ③総合的な学習の時間の単元学習プログラムの本校版自己評価では、全学年で「関心・意欲」に関わる項目が高かった。特に、3年生では新カリキュラム構想を本校入学時から先導的に計画・実施し、個人テーマ探究活動にも取り組んだ結果、全項目で最高値を示した。
- ④本校で育成を目指す生徒像に基づく「学びに向かう力・人間性等」の自己評価と、新たに採用した外部評

価値指標「Ai GROW」の計測コンピテンシーを用いることで、生徒の資質・能力の伸長を可視化することができた。これらにより、生徒自身が今後の生活・行動目標を言語化したり、地域や家庭など学校外でも意識したりすることが進んだ。自己評価におけるア（自制・敬意）の肯定的な割合は95%前後と高かったが、イ（協働と貢献）とウ（意欲と挑戦）はいずれも74%で、実生活や実社会との接点や活用を促す取り組みのさらなる工夫が必要であると分かった。「Ai GROW」における各学年および全校における計測結果からは、本校教育活動を通じて、多くの生徒が「学びに向かう力・人間性等」に関わるコンピテンシーを伸長させていることが分かった。また、その記述回答からも総合的な学習の時間や各教科における探究的・問題解決的な学習活動が効果的であることがうかがえた。3年生ではER（探究）個人テーマ探究活動を実施する前後で、「創造性」の中央値が7ポイント、「影響力の行使」の中央値が6ポイント、「地球市民」の中央値が5ポイント上昇した。特に「創造性」については、67名が10ポイント以上（内22名は20ポイント以上）の大きな伸長が見られた。

- ⑤学校評価アンケート（教員対象）における「学ぶのにふさわしい学校」の肯定的な割合は100%、「意欲的・積極的な学習」は96.7%、「理解しやすく主体的な学習」は100%、「成長の適切な評価」は96.7%となり、研究を推進する学校組織風土が醸成されつつある。
- ⑥社会課題に関わる同一テーマに岡山市内4中学校と取り組んだこと、総合的な学習の時間のオンライン成果発表会に隣接3高校が参加したことにより、生徒の探究活動を通して市民への広報・啓発が進んだ。また、地域との連携により、行政が町づくりの施策を進めることにつながった。

（2）課題

- ①「学びの意義を理解し自ら学び続ける」「SDGsを意識した学びに向かう力・人間性等」の視点をより明確にし、効果的なカリキュラム・マネジメントに関する実践研究を行い、本校が目指す生徒像「自主自律 豊かな心でたくましく」を具現化した「生徒像・リーダー像」について、認知および非認知の両側面から評価を行う。
- ②SDGsを意識した総合的な学習の時間の「学びのカレンダー」と「カリキュラム・マップ」を活用し、単元学習プログラムが生徒の「SDGsを意識した学びに向かう力・人間性等」をより育成するものとなるようPDCAを継続する。
- ③持続可能な社会の構築に資する資質・能力としての「持続可能性キー・コンピテンシー」（UNESCO、2017）と「学習指導におけるESDの枠組み」（国研、2012）の関連を整理する。
- ④可視化されたコンピテンシー（非認知スキル）について、生徒一人一人が自らの学びを省察し改善できるような手立ての工夫を行う。
- ⑤研究主題に対して必要な研修を把握し、選択幅のあるテーマで実施したい。
- ⑥引き続き、積極的に地域や公立校への発信や連携を働きかけたい。

（3）研究二年目へ向けての取り組み

- 「学びの意義を理解し自ら学び続ける生徒を育成するカリキュラム・マネジメント」における多元的評価として、下記の評価を継続する。
 - ・本校版「目指す生徒像に基づく学びに向かう力・人間性等」（自己評価）
 - ・外部評価指標「Ai GROW」（IGS社）によるコンピテンシー計測（自己・他者評価）
 - ・各教科研究の検証問題および評価シート（自己評価）
 - ・総合的な学習の時間「ESDで育みたい能力・態度」評価シート（自己評価）
- 本校の教育研究の取り組みおよび成果を発信する。
 - ・第36回中学校教育研究発表会における全体共通研究および各教科研究の取り組み発信
 - ・文部科学省（国立教育政策研究所）最終報告会における研究成果発表
 - ・学校ホームページ、リーフレット等による研究成果の情報発信
- 本研究について、カリキュラム・マネジメントの3側面（教科等横断的な視点・実施状況の評価と改善・人的物的な体制の確保とその改善）から、学校全体で検証を行う。